

展望らいいぶらりい

日本教育社会学会編

教育社会学の20人

ーオーラル・ヒストリーでたどる日本の教育社会学

武内清  
(敬愛大学客員教授)

重視の東京大学、理論研究や文化の濃厚な京都大学、高等師範の伝統の東京教育大学、文理の伝統の広島大学、地方国立大学の教員養成学部など、大学の出自や伝統が違ふとそれぞれの研究者の研究やその特質に差異を生じさせていることが読み取れる。

教育社会学は戦後に大学の講座や科目がで  
き、伝統的な教育学の中で実証性を重んじ、  
研究を進めてきた新興の分野である。教育学  
が理想や実践を重んじるのに対して、教育社  
会学は現実や実証や批判的観点を重んじ教育  
実践への寄与があまりないように見える。

しかし教育の現実を規定する社会的要因  
(階層、ジェンダー等)や教育組織の解明、  
教育の実態に基づいた政策的提言は、教育の  
理想の実現に欠かせないものである。

本書は日本の戦後の教育社会学の主に第2  
世代(第1世代が基盤を築いた後に活躍した  
世代)の20名の研究者の歩みをオーラル・ヒ  
ストリーの手法で記録に残したものである。  
この手法は聞き手に恵まれると自分史以上に  
興味深い内容になる。自分では気がついてい

ない分野にも、聞き手の質問によつて思いを  
馳せるようになるからである。学会70周年記  
念行事として第3世代の加野芳正会長(当  
時)のもとで吉田文と飯田浩之が責任編集者  
となり、学会の総力をあげての聞き取りや編  
集が行われた。教育社会学の研究者のみなら  
ず、教育関係者、歴史研究者が読んで参考に  
なる本である。

一つの新興の学問分野が市民権を得るまで  
には、既存分野との葛藤や戦い、個人や組織  
の並々ならぬ努力があったことが当事者の語  
りからわかる。個々の研究者が教育社会学と  
いう分野にたどりつくまでにどのような出会  
いや紆余曲折があったのかが示され、研究者  
のライフ・ヒストリーとしても興味深い。

高等教育研究としても読める。実学・政策

教育社会学研究の今後に関しては、柴野昌

山京都大学名誉教授は「理論パラダイムの歴  
史性感覚」をあげ、新井郁男上越教育大学名  
誉教授は「社会学的視点での研究、教員研  
修」の重要性を指摘し、深谷昌志東京成徳大  
学名誉教授は「子ども支援の実践家との連携  
が大事」と述べ、天野郁夫東京大学名誉教授  
は「教育現場を批判的に斜に構えて見るよう  
な教育社会学では現場の力になりえない。も  
っと教職・教員養成の問題に込めていかな  
いといけない」と述べている。

今後の教育研究と教育実践との関係を考え  
る一書にもなる力作である。

A5判 292ページ 本体37000+税  
東洋館出版社 ☎03-3823-9205